坊津一乗院の成立について

栗林文夫

はじめに

九州の西南端に位置する坊津は古くより貿易港として著名で、筑前の博多津・伊勢の安濃津（和泉の堺津をいう場合もある）等とともに日本三津の一つに数えられている。この坊津の地名の由来となったのは、一乗院が三ヵ所に営んだ上坊・中坊・下坊という坊舎であったという説が『三国名勝図会』に見える。これが正しければ、坊津という地名が成立するよりも以前に一乗院は存在していたことになる。しかし、両者がいつ成立したのか詳しいところは不明なままである。坊津については鑑真や遣唐使船との関わりが、一乗院については六世紀頃の日羅による創建や、長承二年（一一三三）に鳥羽上皇院宣を得て、紀州根来寺の別院となったことなどが強調されることが多い。[1]

ところが、近年坊津の北東にある万之瀬川下流域の発掘調査が進展し、これらの成果から坊津の位置付けを従来とは違って相対化する視点が生まれた。さらにこれに関連して、従来は漠然と古代の創建といわれていた一乗院の成立に関しても再考の余地が残されていることが明らかにされつつある。

そこでまず最初に、坊津や一乗院のこれまでの研究史の流れを大まかに整理しておきたい。再考の契機になったのは、一九九六年から行われた日置郡金峰町の持躰松遺跡の発掘調査である。この持躰松遺跡に関する歴史的意義について考察した柳原敏昭氏が、坊津の位置付けについて問題提起を最初に行った。柳原氏によれば、従来の研究は中世後期や近世の坊津のイメージを中世前期にまで遡らせすぎており、交易という面では、万之瀬川河口部の方が卓越していたと述べた。[2]

このような理解の前提には、前年に行われた八木澤一郎氏の報告があったと思われる。八木澤氏の報告は、一二～一三世紀の貿易陶磁器の出土状況を概観することにより、「指宿市・枕崎市・揖宿郡」地域の出土遺跡数が少ないことから、「南西諸島との交易が薩摩半島南端を拠点とせずに行われていた可能性があることを」[3]指摘したものである。後にこの八木澤氏の見解は批判の対象とされるが、柳原氏の問題提起を生み出すことになった重要な研究として位置付けられよう。

右のような文献史学（中世史）側の坊津の評価について、考古学の立場から異議を唱えたのは中村和美氏である。中村氏は一乗院が建立されたといわれる六世紀や鑑真が上陸したとされる八世紀中頃の遺物は坊津にはないと述べ、中世前期に関しても同じで、八木澤氏の言うように遺跡の数が少ないことが流通拠点であることを否定することにはならないと強調する。坊津の歴史は考古資料によっては不明な点が多く、そのまま流通に関して評価がなされていると批判している。[4]また、橋口亘氏は坊津泊海岸で採集した貿易陶磁器を分析して、一四世紀後半から一七世紀前葉の遺物が中心で、中世前期の遺物は若干しかないことを報告している。[5]

このような批判を受けとめ、柳原氏は「その（考古学・筆者註）成果を援用してなんらかの結論を導くことは差し控えたい」として、主に文献史料の検討から坊津の港としての評価を再び論じている。すなわち、坊津の交易活動が文献史料に見えないということと、それと関連して坊津の地名の由来にもなったといわれる一乗院の成立についても初めて疑問を投げ掛けた。詳細は次章以下において述べるが、長承二年（一一三三）の鳥羽上皇院宣が問題が残る史料であること、一乗院の歴史が具体的に明らかになるのは応永年間（一三九四～一四二八）以降で、中世前期の一乗院は不明な点が多いこと等を指摘した。そして、中世前期の坊津は海外交易の拠点というよりも、海外へ渡航する際、あるいは帰航した際の一時的な停泊地として使用された港であると結論付けた。[6] このような坊津の評価は、後の市村高男氏の理解にも受け継がれていくことになる。ともあれ、一乗院の成立に関して初めて疑問を投じた柳原氏の研究は重要で、本稿も氏の研究に触発されるところ大であることを明記しておきたい。

一方古代史の立場から、坊津・遣唐使船・一乗院等に再考を迫ったのは中村明蔵氏である。中村氏は、文献・記録類、発掘調査の結果、伝来の諸文化財等から考えて、一乗院が古代に存在した徴証はないと断言し、坊津の歴史は概して中世の状況を古代に遡らせ、そこに遣唐使（船）と、更には一乗院の沿革を強引に重ね合わせ、幻像を浮かび上がらせてきたと指摘し、このような幻像は近世末以降の歴史の中で形成されてきたことを明らかにした。[7]

また市村高男氏は、坊津が中世前期に古代以来の要津であったとする通説的理解の再検討が求められているとして、遺物や史料が少ないことを理由に重要な坊津の役割を否定的に捉えるのはなお慎重でなければならないと注意を促す。そして坊津の「国際性」は、「日本国」からの出発点、海外からの到着点としての国家的位置付けによるとする。[8]

以上のような坊津の役割を従来より、どちらかというと低く見る研究状況に反論を加えたのが橋口亘氏である。橋口氏は、内陸への交通のアクセスの悪さ等、坊津の地理的自然環境条件が坊津の交易機能を否定的に捉える理由にされていることに対して、「物資の中継地」等、内陸部への交通以外に重点を置く交易の形態もありえるとして、右の研究動向に注意を呼び掛けている。[9]

以上述べた研究史の流れを総括してみると、持躰松遺跡の発掘調査を契機として、万之瀬川下流域を中世前期の交易の拠点と見る考え方が生まれ、やがてこれが貿易港としての坊津の評価の再検討に繋がっていった。そしてこれと関連して、一乗院の歴史にも再検討が加えられ、その結果、創建が古代に遡るほど古い寺院ではないという評価が生まれてきたといえる。

本稿では、これらの研究史の成果を積極的に受けとめ、一乗院の成立に関しての文献史料を再検討してみたい。そして、新たな視点で一乗院の成立を考え直してみると、そこから更に興味ある坊津の歴史の一断面が見えてくるということを指摘してみたい。

なお、一乗院に関する先行研究には、五味克夫氏の一連の研究があり、[10] 本稿で引用・使用する史料もこれらの研究成果に負うものであることを明記しておきたい。

一、長承二年「鳥羽上皇院宣」の再検討

一乗院が古代から盛えた寺院であったという根拠にされる史料に、長

承二年の鳥羽上皇院宣がある。この史料は『三国名勝図会』巻之二十六に書き留められている。まず左に全文を掲げて、この院宣の検討から始めたい。

【史料一】

被院宣偈、依大伝法院座主申請、以西海之龍厳寺、為根来寺別院、可令奉安穏泰平、二世
御願成満之由、祈念之旨、宜遣仰者、
院宣如此、悉之、謹状、
長承二年十一月三日　　右兵衛督源判
大伝法院上人座主御房

この史料は今のところ『三国名勝図会』にだけしか見られず、『旧記雑録』等には収録されていない。文意は、大伝法院座主の申請により、西海の龍厳寺を根来寺別院とするというものである。この史料については、既述のように柳原氏が検討を加えているが、ここでは筆者の見解も含めながら再検討してみたい。

柳原氏が指摘されたように、この史料の問題点は「根来寺」という寺号が長承二年に成立していたかどうか疑わしいということである。「根来寺」の史料上の初見は元久二年（一二〇五）であるという。また覚鑁が豊福寺（根来寺の前身）に居を移すのは保延五年（一一三九）か六年といわれており[11]、鳥羽上皇院宣が出された当時、覚鑁は未だ高野山にあったと思われる。

また「大伝法院座主」・「大伝法院上人座主御房」というのは、覚鑁の事を指していると思われるが、彼が大伝法院座主に就任するのは、長承三年五月八日のことであり[12]、なおかつ彼は初代の大伝法院座主でもあった。この点も右の史料が矛盾しているところである。

更に史料により覚鑁の呼称を集めてみると、長承元年（一一三二）には「正覚房聖人御房[13]」・「大法師[14]」、同二年には「伝灯大法師[15]」・「高野山沙門覚鑁[16]」、同三年には「密厳院（覚鑁の住房・筆者註）御房[17]」・「正覚上人御房[18]」・「覚鑁聖人[19]」・「密厳院聖人御房[20]」等が知られる。長承二年の「高野山沙門覚鑁」という呼称から、【史料一】が出された頃、覚鑁は高野山に住した一僧侶であったことが明らかであろう。

また右の【史料一】の中に、全く「一乗院」が見られないことにも注意が必要である。この史料はあくまでも「龍厳寺」を根来寺の別院とすると述べているのであって、一乗院を別院とするとは述べていない。従って、この時一乗院が存在したのかどうかもわからない。

それでは、龍厳寺とは如何なる寺院であろうか。『三国名勝図会』巻之二十六には、「西海金剛峯如意珠山龍厳寺一乗院」と見えることから、一乗院は龍厳寺の中に設けられた院家（子院）であったと推測される。更に同書が述べる、日羅による開創伝承にしても、開創したのは一乗院ではなく、龍厳寺であった。後に創建された院家（子院）である一乗院の隆盛に比して、龍厳寺がどのようになって行ったのかも分からない。いずれにしろ【史料一】から、長承二年一一月三日当時に一乗院が存在したことの根拠とはなりにくい。

最後に、この院宣の奉者「右兵衛督源」は実在していない人物である。『公卿補任』によれば、長承二年当時の右兵衛督は「藤原顕頼」で、同四年に督を辞すまでこの官職にあった。従って「右兵衛督源」は、正しくは「右兵衛督藤原」と書かれていなければならないことになる。

以上指摘した点から考えてみて、この長承二年一一月三日鳥羽上皇院

宣は、疑問が多い史料であると言える。従って、今までこの史料を根拠にして一乗院の古さを述べていた見解は改められなくてはならない。この【史料一】を収録する近世の地誌は、現在のところ、『三国名勝図会』が知られるのみである。これよりも前、文化三年（一八〇六）に編述された『薩藩名勝志』巻之六に、【史料一】に関する注目すべき記事が見られる。関連箇所を左に記そう。

【史料二】

廿八世住僧快宝所記勅願由来記及ひ御照覧宝物記等を按するに、如意珠山一乗院の号ハ、鳥羽院の勅号にて、長承二年十一月三日当寺をもて根来寺別院となさらむと云々、此事覚山所記由来記に見えす、不審少なからず、再考すへし、また日羅開基の時、鳥越山龍厳寺と名付る所と、寛延四年十月快宝宝物案内記に見えたり、此事いかゝあるへき[21]、

二八世住僧快宝が記したという『勅願由来記』・『御照覧宝物記』・『宝物案内記』等の諸書について、詳しいことはわからない。『坊津町郷土誌上巻』には、快宝和尚著『一乗院宝物記』を載せている（五三～五八頁）。これが『御照覧宝物記』・『宝物案内記』等と同じかどうかわからない。『一乗院宝物記』には、「山寺院号」・「仏像及神像」・「仏画仏書等」等の項目に分けて、一乗院の宝物を列挙し、その由来を説明している。この中に、既に長承二年に如意珠山一乗院の院号を鳥羽法皇から賜ったという事が記されている。この『一乗院宝物記』がいつ著されたものか不明であるが、快宝の住職在任期間が延享年間（一七四四～一七四八）であること[22]、【史料二】に見える『宝物案内記』が寛延四年（一七五一）に著されていることなどから、一八世紀半ば頃の成立と推測される。

また、宝暦九年（一七五九）五月一五日の「一乗院下乗之碑写[23]」に鳥羽上皇のことが見えることなどから、一八世紀半ば以降には、【史料一】が既に定着していたものと思われる。

一方、延宝元年（一六七三）に書かれた「西海金剛峯龍厳寺一乗院来由記[24]」には、鳥羽上皇に関する記述は全く見られず、代わりに第四世頼俊法印が修業していた根来寺を応永一五年（一四〇八）に去り、一乗院に帰った後、根来寺の別院となったと記している。これらのことから考えて、【史料二】は一八世紀の半ば頃に成立したと考えられよう。いずれにしても『薩藩名勝志』が【史料一】に関して疑問を投掛けたことは、当時としては卓見であったといえよう。

それでは、【史料一】は一八世紀半ばに何を基にして、どのように作り出されたのであろうか。この問題に全面的に答える準備はないが、「根来要書」の中にヒントになる史料が存在する。左に全文を掲げる。

【史料三】

長承院宣 持明院事

被　院宣云、**依**阿闍梨真誉**申請**、**以**彼建立堂持明院**為**大伝法院末寺、**安穏泰平**宝寿長遠之由、可令　奉**祈念之旨**、**宜遣仰者**、**院宣**書**如此**、**悉之**、**謹状**、

長承二年十一月廿日　　**右兵衛督**（藤原顕頼）　在判

奉　真誉阿闍梨**御房**[25]

この史料と【史料一】とを比較してみると、似通っている箇所が多いことに気付く（【史料三】のゴチック部分）。院宣という決まった様式であるので、ある程度似るのは当然であるが、【史料一】は【史料三】を

基にして作成されたのではないかと推測したくなるほどである。

ともあれ、従来から一乗院が古代以来存在していたという唯一の論拠となっていた【史料一】は、疑問点が多い史料であることが明らかになった。また中村明蔵氏が言うように、この他に発掘調査の成果や伝存する文化財等から見ても一乗院が古代から存在した寺院とは言えない。[26] 従って、新たな根拠が見つからない限りは、一乗院の成立を古代に遡らせることは出来ないことになる。それでは、一乗院は誰が、いつ創建したのであろうか。次に章を改めて述べてみたい。

二、一乗院と島津氏久

一乗院の創建を考える上で参考となるのが、『三国名勝図会』巻之二十六に見える次の一節である。

【史料四】

成円法師なる者あり、延文二年、丁酉の歳、当院を再建して、中興第一祖となる、成円法師は、素日野少将良成といふ、（中略）既にして足利大将軍尊氏に謁して、寺院の再建を請ふ、文和三年、春、願書を京師に上る、伝奏して許可を受く、　邦君齢岳公、有司に命して、当寺を経営す、延文二年、功を畢れるなり、

右の記事から、成円法師が延文二年（一三五七）に一乗院を再建して、中興第一祖となったこと、その再建には邦君齢岳公（島津氏久）が関与しており、有司（役人、官吏）達に命じて、一乗院を経営したこと等を読み取ることができる。同様の記述は、幕末に著された『神社調』にも見られるが、更に古い「西海金剛峯龍厳寺一乗院来由記」には、延文二年に成円法師が一乗院中興第一祖となったことは記すが、氏久の助力があったことは見えない。

また『三国名勝図会』巻之二十六、清月山広大寺の項にも「齢岳公上京し給ひ、帰国の時、御船坊津に着き、広大寺宿せられ、香火田を寄附し給ふといへり、当寺後は山に依り、前は坊港に対し、港内を一望に収め、景色佳勝なり、」という注目すべき記事を見出すことができる。

更に、伊地知季安の編述になる『花尾社伝記（中）』にも氏久と一乗院の関係を示す史料が見える。

【史料五】

○（永和元年）是歳秋、氏久公命坊一乗院宥海上人（二世主僧、字曰乗通）勤修求聞持於奥院、凡一百日、至冬十一月十三日、竣立願功、因公有精願（誓カ）也、　※：（　）内は割り注

○二年丙辰、宥海上人、復奉公命、師衆僧、真読大般若経十二部於花尾平等王院、亦有誓願故也、[27]

即ち、永和元年（一三七五）秋、氏久が一乗院宥海上人に奥院（一乗院の子院）にて求聞持を勤修させ、翌年も花尾平等王院にて大般若経を真読させたというものである。

以上のように、少ない史料からではあるが、氏久と一乗院・坊津との関わりを見出すことができる。前章で指摘したように一乗院が古代から存在したことの根拠とされた【史料一】が、疑問の残る史料であるということ、更に一乗院が鎌倉時代に存在したことを示す史料が皆無であること等から考えてみると、中興第一祖のことを記す【史料四】こそが、一乗院の開創のことを言っているのではなかろうか。つまり、一乗院の開基を島津氏久、開山を成円法師と考えてみることはできないだろうか。勿論、延文二年になって初めてここに一乗院という寺院が創建されたというのではなく、それ以前から前身となる寺院、おそらくは龍厳寺とそ

の子院が営まれていたものと思われる。

しかし、このように述べると、一乗院に伝来したといわれる「坊津一乗院聖経類等」があるではないかという批判が予想される。実際にこの聖経類の中には、平安時代以来の聖経類が多数残っているが、これらが平安時代に一乗院において作成された聖経類であるということを示す証拠はない。またこれらの聖経類の中で、年号と一乗院の院名がセットで判明するのは、貞治四年（一三六五）閏九月二六日の聖経に見える「薩州坊津龍厳寺一乗院常住」という文言だけなのである。従って、右で延文二年に一乗院が開創されたと指摘したことと、矛盾するものではない。また建保四年（一二一六）の聖経に「一乗院」の黒印が捺されているが、これについても後世に捺された可能性も否定できず、従って建保四年に一乗院が存在したことの証拠にはならない[28]。

三、一乗院の創建理由

次に問題となるのが、氏久は何故一乗院を創建したのかということである。一乗院創建よりもやや遅れて、氏久に関して次のような注目すべき事実が知られる。

【史料六】

其臣有志布志島津越後守臣氏久。亦遣僧道幸等。進表貢馬及茶布刀扇等物。上以氏久等。無本国之命。而私入貢。仍命却之。而賜道幸等文綺紗羅各一匹。通事従人以下。銭布有差[29]。

【史料七】

日州龍興山大慈禅寺第二世剛中柔禅師豊之後州人也、幼師事玉山和尚、雉髪染衣、参禅遊方、凡居龍山者四十余年、先仁礼頼仲・畠山直顕崇敬之、後島津氏久帰依之、泛海入太宋求蔵経歴三祀而帰[30]、

【史料六】は明の『太祖実録』巻九〇の洪武七年六月乙未条の記事であるが、西暦では一三七四年、日本では文中三年にあたる。この史料によると、氏久が僧道幸等を明に派遣したが、本国の命のない私の入貢であったので斥けられているが、この時、明からは道幸等に文綺・沙羅を各一匹、通事・従人以下にも銭・布等が与えられていることが知られる。

【史料七】は、島津氏久譜に見える記事であるが、正文は志布志大慈寺が所蔵していたようである。氏久が大慈寺二世剛中玄柔に深く帰依していたこと、海を越えて明に入り、「蔵経[31]」を求めて三年の歳月をかけて帰国したこと等が記されている。剛中は氏久の死去に際して、「祭薩隅日三州太守齢嶽久公大禅定門文[32]」を贈るなど、かなり親密な交流があったことが推測される。明より持ち帰った大般若経を大慈寺に施入したのは、永和三年（一三七七）であったから[33]、【史料七】に見えるように三年間明に滞在したのであれば、明に入ったのは【史料六】にあるように文中三年になる。従って、大般若経の招来に氏久の援助があったものと推測される。

氏久の後、久豊も永楽一六年（一四一八、応永二五）に明に使いを送ったが、明の海禁政策のためにこれも失敗している。少ない事例ではあるが、これ以外にも記録に残らなかった島津氏による対明貿易はあると思われ[34]、氏久もまた対明貿易を志向していたといってよかろう。

以上のように見てみると、明との貿易を望んだ氏久は、その拠点港として志布志だけではなく、坊津もその一つに加えたかったのではないかと推測され、そのために坊津に一乗院を創建したのではなかろうか[35]。

ところで、氏久が一乗院を創建するためには坊津に何らかの権益を有していたものと思われるが、当時の坊津の領有関係については必ずしも

明かではない。これよりも前の鎌倉時代の末期①嘉元四年（一三〇六）四月一四日には、千竈時家が嫡子貞泰に「ハうのつ」を譲り[36]、②応永年間（一三九四～一四二八）には薩摩平氏一族の別府氏が坊津を知行していた[37]。③応永二七年（一四二〇）頃には、島津久豊が若年の別府氏当主を婿として、伊集院氏などを服属させ、久豊は南薩を平定した[38]。これは坊・泊両津の領有が目的であったといわれている[39]。氏久が坊津に何らかの権益を有していたとすれば、それは①と②の間の時期になるが、この前後の詳しい状況は不明である。

次に問題になるのは、明との貿易を目指していた氏久が、何故港町坊津に一乗院という寺院を建立する必要があったのかという事である。村井章介氏の研究によれば、ヨーロッパの港町の最小限の構成要素は、船着き・港に住む人の家・宗教施設である教会と墓であるという。また日本の港町にも宗教的な雰囲気が濃厚に漂っているという[40]。このことを参考にしてみると、一乗院ができるまで（鎌倉～南北朝前期）坊津には中核となる寺院が無かった（龍厳寺やその子院があったと思われるが、その実態は不明）。港町として本格的に発展させることを考えていた氏久は、坊津を代表する宗教施設として一乗院を開創したのではなかろうか。

市村高男氏が坊津の特徴を、薩摩半島の内陸部を向いておらず、海の外を向いていると言ったことを考え併せると[41]、港町坊津に作られた一乗院という寺院の役割は、外国使節を迎える迎賓館的役割を担い、檀那・外交使節・貿易従事者達のサロン的施設としての役割も担ったのではなかろうか[42]。

また『花尾社伝記（中）』寛正二年条には、島津忠国が琉球の事を祈らせるために、一乗院に若干の所領を寄進すると、実際に琉球人がやってきたので、忠国は大変喜んで、泊茅野に亭を構え、一乗院の脇坊千手院を宿坊と定め、ここで琉球渡海を夢見ていたという[43]。また坊津滞在中に、忠国が一乗院の頼憲上人の秘密教を聞いたことなどが記されている。彼が一乗院や坊津に非常な興味関心を示したことから考えると、琉球人が実際にやってきたのは一乗院ではなかったかと推測される。事例は多くないのだが、これらのことから考えて一乗院の僧侶達が琉球使節の接待をも担ったのかもしれない[44]。

おわりに

一九九六年に行われた持躰松遺跡の発掘調査を契機にして、坊津の評価の再検討がなされるようになり、そこから一乗院も古代に遡るほど古い寺院ではないといわれるようになってきた。このような最近の研究状況を受けて、本稿では長承二年の鳥羽上皇院宣を検討し直し、問題点が多い史料であることを論証した。そうすると、一乗院が平安時代から存在したことを示す根拠は無くなってしまうことになる。

そこで次には、一乗院の成立をどこに求めるかが問題になるのであるが、従来中興第一祖といわれていた成円と、それを助勢した島津氏久の存在を積極的に評価してみた。更に氏久の関連史料を調べてみると、海外貿易を志向していた形跡があり、検討の結果、氏久は坊津の貿易港としての重要性を考えて、拠点となる宗教施設を作るために一乗院を創建したと推測した。以上の理解は、現存する文献史料・考古資料から得られる年代と合致する[45]。

『三国名勝図会』巻之二十六は、長承二年の鳥羽上皇院宣に続けて、一乗院の歴史を「其後星霜を経て、寺院漸く衰へ、或は断へ、或は続

く、」と一乗院の歴史を記す。『坊津町郷土誌上巻』もこれをベースにして、「さてその後星霜を経て、ようやく衰え、あるいは断えあるいは続くというまことに心細い形で、鎌倉から南北朝の争乱期を経たのであった。したがってこの間の確かな史料もなく、伝うべき事柄も残っていない」（三三頁）と述べている。

平安末から鎌倉時代にかけて、確かな史料が無いにもかかわらず、右のような理解がなされるのは、鳥羽上皇院宣の存在に引き寄せられ過ぎた結果といえよう。

一点の史料が長い間ある史実の根拠とされてきた。しかし、これをよく検討してみると、問題が多い史料であることがわかった。この史料から全く自由になって、改めて一乗院の歴史を考えてみると、従来では見えてこなかった事実が浮かび上がり、島津氏と一乗院との関係も積極的に評価することが出来るのである。

しかし、このように述べると、一点だけ従来の解釈と矛盾する問題が発生する。このことを最後に検討しておきたい。それは、「西海金剛峯龍厳寺一乗院来由記」に見える「号上之坊・中之坊・上中坊、三所営坊舎、因茲号坊津」という記述である。一乗院があったから坊津の地名がついたと述べている。同様の説は『三国名勝図会』にも載せるし、『鹿児島県史・第二巻』（八二五・八二六頁）も採用している。この説自体は充分な検討が必要であるが、仮にこれを真実とすれば、ここで問題になるのが、「坊津」という地名が何時からあるのかという点であろう。史料から「坊津」という地名を探してみると、今のところ、前章で指摘した嘉元四年（一三〇六）の千竈時家譲状に見える「ハうのつ」が最も古い史料であるようである。[46]

既述のように、一乗院が延文二年（一三五七）に創建されたとするならば、坊津の初見からおよそ半世紀遅れることになる。一乗院が延文二年に全く新しく出来たのではなく、その前身となる何らかの寺院（＝龍厳寺と附属の子院等）が存在していたと思われ、ここから坊津の地名が起こった可能性もあると思う。ともあれ、このように考えると一乗院の創建を南北朝期まで繰り下げても従来の説とは大きな齟齬はきたしていないと思われる。やはりこの説も、一乗院が古代から存在していた寺院（日羅による創建）であったという先入見が基になり生まれたものではなかろうか。

本稿では、一乗院の成立を、島津氏による対外交易上の理由から説明してみた。いわば、一乗院が日本の外に対して担った役割の一端を検討したに過ぎない。一乗院には「坊津一乗院聖経類等」（県指定有形文化財）が一八巻残されており、その全面的検討は未だ果たしていないが、この聖経類には畿内の真言宗寺院との繋がりが読み取れ、遠く関東の寺院までも所見がある。国内の真言宗寺院のネットワークに一乗院も含まれていた証拠である。[47] 真言宗寺院としての一乗院、対外交易の拠点施設としての一乗院、この両者の接点に、一乗院が担った歴史的意義を見出すことが可能であろう。この歴史的意義を明らかにすることによって、中世の坊津が置かれた位置、ひいては中世の地方寺院が担った歴史性の一端の解明に結びつくものと思われる。聖経類等の具体的検討や、他の真言宗寺院間との繋がり等については、他日を期したい。

註

（1）例えば、森高木『坊津―遣唐使の町から―』春苑堂書店、一九九二年など。

(2) 柳原敏昭「西の境界領域と万之瀬川」(村井章介他編『境界の日本史』山川出版社、一九九七年)。
(3) 八木澤一郎「鹿児島県における中世考古学の現状と課題」三四頁(『鹿児島県考古学会・沖縄考古学会第四回合同研究会資料集』一九九六年)。
(4) 中村和美「鹿児島県坊津と出土陶磁器」(『貿易陶磁研究』第一八号、一九九八年)。
(5) 橋口亘「鹿児島県坊津町泊海岸採集の陶磁器」(『貿易陶磁研究』第一八号、一九九八年)。
(6) 柳原敏昭「中世前期南九州の港と宋人居留地に関する一試論」(『日本史研究』第四四八号、一九九九年)。同「中世日本の北と南」(歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座第四巻・中世社会の構造』東京大学出版会、二〇〇四年)でも同様の指摘がある。
(7) 中村明蔵「薩摩坊津と遣唐使船」(『鹿児島国際大学国際文化学部論集』第三巻第三号、二〇〇二年)。
(8) 市村高男「一一～一五世紀の万之瀬川河口の性格と持躰松遺跡―津湊泊・海運の視点を中心とした考察―」(『古代文化』第五五巻第二号、二〇〇三年)。
(9) 橋口亘「中世港湾坊津小考」(橋本久和他編『中世西日本の流通と交通』高志書院、二〇〇四年)。
(10) 五味克夫「坊津一乗院関係史料について」(『鹿児島中世史研究会報』第四〇号、一九八一年)・「坊津一乗院と一乗院関係史料」(『一乗院跡』〈坊津町埋蔵文化財発掘調査報告書1〉坊津町教育委員会、一九八二年)・「坊津一乗院聖経類等」(『鹿児島県文化財調査報告書』第三九集、鹿児島県教育委員会、一九九三年)。
(11) 前掲柳原「中世前期南九州の港と宋人居留地に関する一試論」。
(12) 「大伝法院座主補任次第・大伝法院塔内并本尊等目録」(根来寺文化研究所編『根来寺の歴史と美術―興教大師覚鑁と大伝法堂丈六三尊像―』東京美術、一九九七年)には、「第一根本々願上人覚鑁、長承三年五月八日補任也」と見え、覚鑁が初代の大伝法院座主であることが判明する。
(13) 「根来要書上」長承元年一二月九日鳥羽上皇院宣(『和歌山県史古代史料二』六二号、以下本書からの引用は文書番号のみを記す)。
(14) 「根来要書下」長承元年一二月日覚鑁下文案(六八号)。
(15) 「根来要書下」長承二年二月日覚鑁下文案(七三号)。
(16) 「根来要書下」長承二年一二月二八日紀伊国在庁官人解案(九七号)。
(17) 「根来要書中」長承三年六月二三日円性起請文案(一一二号)。
(18) 「根来要書上」長承三年八月二日鳥羽上皇院宣案(六二号)。
(19) 「根来要書上」(長承三年カ)九月二一日鳥羽上皇院宣案(一一九号)。
(20) 「根来要書中」長承三年一一月一三日行厳起請文案(一一九号)。
(21) 『薩藩名勝志(その二)』(鹿児島県史料集四三)。
(22) 『坊津町郷土誌上巻』五二頁。
(23) 『一乗院諸記・全』(東京大学史料編纂所蔵)。
(24) 前掲五味「坊津一乗院聖教類等」。
(25) 九四号。
(26) 前掲中村明蔵「薩摩坊津と遣唐使船」。

(27) 前掲五味「坊津一乗院と一乗院関係史料」。

(28) 五味克夫氏も成巻後に捺されたものと推測される（「坊津一乗院聖経類等」）。

(29) 日本史料集成編纂会編『中国・朝鮮の史籍における日本史料集成明実録之部一』国書刊行会、一九七五年。

(30)『鹿児島県史料旧記雑録前編二』四五九号。

(31) この「蔵経」とは、大慈寺に伝来する宋版大般若経を指すものと思われる。別の一組は東福寺に現存している。前者は県指定有形文化財になっている。梶浦晋「日本現存の宋元版『大般若経』―剛中玄柔将来本と西大寺蔵磧砂版を中心に―」（『金沢文庫研究』第二九七号、一九九六年）・『かごしま文化財事典』六二頁、鹿児島県教育委員会、二〇〇二年を参照。

(32) 加藤正俊編『剛中玄柔禅師語要』即宗院、一九八七年。

(33)「慧日山東福禅寺伝法輪蔵記」（『剛中玄柔禅師語要』所収）。

(34)『宮崎県史通史編中世』四〇八～四一〇頁。氏久の大般若経将来についても同書に指摘がある。

(35) 氏久は自らが開基となった寺院に何故一乗院という名を付けたのであろうか。私見によれば、宗派は異なるが、藤原氏の氏寺である奈良興福寺の院家一乗院の存在が大きかったのではないかと推測される。その名の由来は、権大僧都定昭が法華一乗に傾倒し、往生極楽を求めたことが由来と言われている（笹本正治『日本の中世三・異郷を結ぶ商人と職人』一九頁、中央公論新社、二〇〇二年）。この一乗院は島津荘の領家として、南九州・島津氏と深い関係にあった。更に一乗院と並ぶ著名な院家の大乗院も、時代は下るが同名の寺院が鹿児島にも存在している。興福寺の院家と全く同じ名の寺院が、二つも鹿児島にあるというのは偶然ではなかろう。これを論証することは難しいが、傍証としては、例えば豊後の宇佐弥勒寺の末宮大隅正八幡宮には、弥勒院という神宮寺が存在していた。また中央の神社を勧請して、地方に同名の神社を創建することは枚挙に暇がないほどである。島津氏の領国に作られた一乗院と大乗院は、近世では前者が二五六石余り、後者が八八二石余りの寺高を有しており、鹿児島大興寺とともに領内の真言宗の三本山とされた。また門主が着座する順番も、大乗院は第四位、一乗院は第六位（「島津家列朝制度」巻之二十二、『藩法集八・鹿児島藩上』所収）で、藩主島津氏から篤く処遇されていた。ところで、一乗院聖経類等を調査した斎藤彦松氏は根来寺の山号が「一乗山」であることから、一乗院の院号が生じたとする（坊津歴史資料センター輝津館所蔵『坊津町仏書資料群書目要記（コ―二四）』一一頁）。斎藤氏は同時に、長承二年の鳥羽上皇院宣を引用しながら、一乗山から一乗院の名が生まれたといっている。しかし本文でも述べたように、長承二年の段階では根来寺が存在したかは疑わしく、そうするとこの論は成立しない。また一乗院の開山成円は、仁和寺の寛性法親王より広沢派の真言秘法を伝えられ、印可を受けたという史料はあるが（『三国名勝図会』巻之二十六）、根来寺との関係を示す史料は見当らない。このようなことから、やはり坊津一乗院の開基が島津氏であったという点を積極的に評価して、本稿では奈良の一乗院との関連性を指摘しておきたい。

(36)「千竈文書」一号、嘉元四年四月一四日千竈時家譲状（『鹿児島県

史料旧記雑録拾遺家わけ六』)。

(37) 年未詳二月二四日芥河愛阿書状(『鹿児島県史料旧記雑録附録一』二二四号)。

(38)『山田聖栄自記』(鹿児島県史料集七)。

(39)『日本歴史地名大系第四七巻・鹿児島県の地名』二四一頁、平凡社、一九九八年。

(40) 村井章介「瀬戸内海からバルト海・北海へ」・「北国航路の港町—越中国放生津」(同『国境を超えて—東アジア海域世界の中世』校倉書房、一九九七年)。

(41) 市村高男「中世後期の津・湊と地域社会」(中世都市研究会編『津・泊・宿—中世都市研究三』新人物往来社、一九九六年)。

(42) 時代はやや下るが『三藐院記』には、坊津に配流になった近衛信尹(信輔)と一乗院住持との交流がかなり頻繁であったことが記されている。具体的には一乗院で行われる風呂・食事・酒宴・仏事・観梅等様々な催しに信尹が参加している。

(43)『坊津町郷土誌上巻』一四八・一四九頁。

(44) 古琉球・近世を通じて琉球の寺院は、臨済宗か真言宗に属していた(下郡剛「琉球における寺院と茶」、国立歴史民俗博物館編『〈歴博フォーラム〉中世寺院の姿とくらし—密教・禅僧・湯屋』山川出版社、二〇〇四年)。この辺りからも、真言宗寺院一乗院との関わりが想定されよう。

(45) 前掲中村明蔵「薩摩坊津と遣唐使船」。

(46)『角川日本地名大辞典四六・鹿児島県』五七八頁、角川書店、一九八三年。なお、『長門本平家物語』巻第五「成経被参詣大隅正八幡宮事」に「房の泊り」が見える。しかし、『平家物語』は一三世紀前半に成立し、それ以降次第に増補されていったと考えられていて(益田宗「平家物語」、『国史大辞典』第一二巻、吉川弘文館、一九九一年)、この部分が原『平家物語』であるのかどうか、またいつ書かれたものか俄には判断ができない。従って、明確な年代が記された初見史料であるという意味で本文のように書いた。

(47) 一乗院の聖経類等の中に、東国の寺院で書写されたものがあることについては、既に福島金治氏の指摘がある(同『金沢北条氏と称名寺』三〇九・三一〇頁、吉川弘文館、一九九七年)。また、二〇〇四年一一月九日に一乗院聖経類等の調査中に筆者が確認した「日本図」も真言宗寺院間で密教的教義が共有されていたことを物語っている。この日本図については、橋口亘氏の紹介がある(「収蔵品紹介・坊津一乗院聖経類等『密教関係巻物』収載の独鈷形『日本図』」、『輝津館通信』No.1、坊津歴史資料センター輝津館、二〇〇四年一二月一一日)。また「日本図」確認の経緯・同図の現状や歴史的意義等全般的問題については、二〇〇五年二月五日、鹿児島大学法文学部で開かれた鹿大史学会において、「坊津歴史資料センター輝津館所蔵の『日本図』について」と題して口頭報告を行った。

【附記】

(1) 本稿校正中、中村明蔵『鑑真幻影—薩摩坊津・遣唐使船・肥前鹿瀬津』(南方新社、二〇〇五年二月二〇日)が上梓された。註(7)で引用した論文や遣唐使船・鑑真等に関する論文が収録されていて、本稿とも関連深い研究である。併せてご参照いただきたい。

(2) 【史料二】で引用した『薩摩名勝志』巻之六には、この部分に続

けて「如意珠山龍厳寺一乗院の号ハ成円法印再建の時名付る所歟」とある。長承二年の鳥羽上皇院宣に疑問を投げ掛けたことといい、一乗院の院号の始めを成円法師に持っていくこととといい、同書の見解は本稿の結論と通じるところが多い。

（本館　学芸専門員）